

ニッポン

ドクター和の

臨終回巻



長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。西国際大学客員教授。

症状が重なるため、誤診されたり、誤った処方をされたりして悪化してしまうケースも実は多いようです。

進行を遅らせる薬はあります
が、完治させる治療法はまだ確立されていません。進行具合は

人それぞれで一様ではありません。
それぞれで一様ではありません。

はしださんの場合は、20年間も難病と共存できたのですから、立派な闘病であったと思いまます。

今年4月には、きたやまおさ

むさんや杉田二郎さんと一緒に車椅子で京都のコンサートに参加。「風」を披露したそうです。

しかし、翌5月に急

性白血病を発症。抗がん剤治療を受けて、いつたん改善したもの

の、これにより抵抗力が落ちたのでしょう。パーキンソン病も悪化。嚥下（えんげ）機能が低下し、食事が難

しくなっていきました。
パーキンソン病が進行し、食事によって答えは違ってきますが、はしださんは買ろうを造らなかつたようです。
「最期にステーキを食わせろ」と食欲を示していたように、死の10日前には、病院にお見舞いに来た仲間たちとギターを弾いて歌ったそうで、周囲の人も「ありえない」と驚いていたようです。

危篤状態になつてからも息子さんにアイスクリームをスプーンで数口食べさせてもらい、満足げだったと言います。

長い闘病生活ではありました
が、最期まで音楽を楽しみ、食べることができたのですから、見事な平穀死です。パーキンソン病であつても最期まで人生を謳歌（おうか）しよう。多くの患者さんに、暖かい「風」のようなメッセージを残してくれました。

34 はしだのりひこ



昭和40年代、日本のフォーク音楽をリードしていたはしだのりひこさんが12月2日、72歳で旅立ちました。パーキンソン病で死去との報道でした。

讣報が流れたその夜、桑田佳祐さんがラジオで「日本のボル・サイモンだった」と追悼し、ヒット曲『風』をかけたことからも、音楽シーンに大きな影響を与えた人物だったことがわかります。

はしださんの長女によると、パーキンソン病を患つたのは約20年前。9年前に奥様を亡くされた頃から体調が悪化したようです。

高齢化に伴い、パーキンソン病の患者さんが増えています。脳幹

最期も歌つて残した「風」